

序 ヴァレリーと「事件」

1 白いテープ

ポール・ヴァレリーが一八九四年ごろから開始し、一九四五年の死の直前まで書いていた日記は一般に『カイエ』と呼ばれているが、そのオリジナルはパリのリシュリュー通りのフランス国立図書館に保管されている。今では国立図書館が運営している電子図書館「ガリカ」(Gallica)にアクセスしさえすれば、なんの制限もなしに、だれでも、いつでも、どこにいてもその電子版が検索できるようになっている。かつて、ヴァレリーの作品や『カイエ』のオリジナルを現地で調べるために、しばらく前から旅の準備を入念に整えなければならなかった世代の人間にとっては隔世の感がある。おそらく、このような感慨自体がもうすでに時代遅れになってしまっているのだろう。とはいえ、どんな資料に関しても言えることだとは思いますが、実際に一度でも手に取って見たことのある資料をパソコンの画面上で見直したときには、何とも言えない違和感を覚えるものだ。ヴァレリーの『カイ

エ』に関して言えば、その文字の形、大きさ、筆勢、インクの色、紙質、紙片上での文字やデッサンの配置等々に関して、実際はこんなはずではなかったと思うことが多い。視覚的な記憶、さらには触覚的な記憶が液晶画面に映し出される像に心のうちで密かに異議を唱える。しかし、その声もやがて鎮まってくる。というのも、肝心の記憶そのものが頼りにならないことに気づかされるからだ。こうして、茫然としたまま、液晶画面に目を泳がすことになる、軽快にサーフしているというよりは溺れそうになって。もちろん、今さら言うまでもなくネット上の検索には計り知れない大きな利点がある。なにより、図書館の閉館時間などをまったく気にしなくてもいいのだから。それに、とりわけ、のんびりと画面をながめていると、現地で気づかなかった細部にふと目が留まることもあるし、不思議な事件の数々に立ち会うこともある。

ヴァレリーの六十歳の誕生日にあたる一九三一年十月三十日に書かれたと思われる『カイエ』の一ページには次のような断章が見られる(図0-1, 2)。

ロヴェイラ事件

K事件とR V事件

激しい状態——自己——暗示。要するに、記述が必要な病気。

感覚——器質的な。

情愛 (Tenerza)、それが変質し、コロイド粒子が凝結したような状態。

衝撃。墜落。

頭蓋骨のてっぺんで頭痛 (dolor capitis) ——がするほど。

とはいえ、見せかけだけの性格。体系の喜劇？ 痛み⇕感覚神経の夢か？⁽¹⁾

91,2
20.28
31
16.2.68
39
11

Uats aigus - auto-suggestion.
 En somme maladie d'écrite
 Sensation - organique.
 Penerezza qui tourne, floccule.
 choc - chute -
 juspi: dolor capitis - au sommet
 du crâne -
 caractère appendant feint. Comédie
 du système? Douleur \equiv rène des
 nerfs sensitifs.

図 0-1 白いテープで隠された『カイエ』の断章。上部二行が隠されている (Cahier 144, 89)

91,2
20.28
31
16.2.68
39
11

Affaire Kov..a.
 Affaire K et Affaire R.

Sensation -
 Penerezza qui tourne, floccule.
 choc - chute -
 juspi: dolor capitis - au sommet
 du crâne -
 caractère appendant feint. Comédie
 du système? Douleur \equiv rène des
 nerfs sensitifs.

図 0-2 白いテープが移動され、図 0-1 で隠されていた二行が見えている (Cahier 144, 90)

これは、彫刻家ルネ・ヴォーティエ（一八九八—一九九一）への苦しい片思いに悩むヴァレリーが、自らの症状をまさに「記述」している場面であるが、実は最初の二行「ロヴィラ事件／K事件とRV事件」はCNR S（フランス国立科学研究中心ター）作成の『カイエ』³からも、ジュディス・ロビンソンが編纂したプレイヤード版の『カイエ』³からもきれいに消されている。想像するに、それはこれら二つの『カイエ』の出版時にはまだ存命だったヴァレリー家の人々の意向をフランス国立図書館とCNR Sが汲んだうえでの判断であろう。では、CNR Sはこれらの二行をどのような形で消したのかという点と、『カイエ』のオリジナルに改変を加えることはさすがにできないので、印刷の際にこの二行の部分に上から白いテープを貼って覆ったままでフアクシミリ印刷をした。プレイヤード版の『カイエ』の方は、テープで隠された二行の存在にはいつさい言及せずに、CNR S版の『カイエ』を忠実に活字化したというわけである。しかし、その後しばらくたって、おそらく、一九八〇年代に国立図書館がオリジナルの『カイエ』を電子化する作業を進める過程で、白いテープは剥がされた。まさに画期的なことである。なぜなら、その結果、研究者も含めほとんどの人たちが先ほどの二行を初めて目にすることができるようになったからである。しかし、驚きはそれだけではなかった。というのも、国立図書館の電子版作成スタッフは、問題の白いテープが剥がされる以前の画像と、テープを剥がし、隠された二行をあらわにした画像を両方とも再現してネット上に公開して見せる英断をくだしたからである。より正確に言えば、作成スタッフはテープを除去したのではなく、テープをそのまま二行下にずらしたのである。そのためテープはそのまま残されている。これだと、まるで自分たちの前任者が犯した隠蔽行為を誇示しているようなものではないだろうか。なぜなら、このようなテープを貼られていて、その後剥がされたと思われる箇所は少なからずあり、テープを剥がした後に残った茶色の染みのせいでそれと推測されるものの、白いテープがそのまま残されている箇所は『カイエ』全体を通してみてもそう多くはないからである。これはスタッフたちの不注意なのだろうか、それとも私たち読者にたいする彼らの卓越したサービス精神とユーモア感覚のまじった目配せなのだろうか、どうかみなさ

ん、この二行に注目してください……。

いずれにしても、このテープがなかったなら、まさにヴァレリーが偏愛したエドガー・アラン・ポーの『盗まれた手紙』のように、パソコンの画面でいつでも見える状態になってはいるものの、この二行は三万ペーヅ近くに及ぶ『カイエ』の中に埋もれて、気づかれずに終わってしまったかもしれない。ちなみにポーは『盗まれた手紙』と同様にオーギュスト・デュパンが登場する『モルグ街の殺人』で、デュパンに「真理はいつも井戸の底にあるとはかぎらない。〔……〕真理はいつも変わることもなく表面にあると僕は思う。僕たちは真理を谷底で見つけ出そうとするけれど、実際に真理が発見されるのは山々の頂上からなんだよ」と語らせていた。

2 「ロヴィラ事件」

ところで、この二行には何が書かれていて、そこから何がわかるのだろうか。まず、最初の「ロヴィラ事件」と訳した部分は原文では「Affaire Rovira」と記載されている。「」の部分は「E」が省かれていると判断し補ったが、ヴァレリーは Rovira と明確に書くことをためらったとも思われる。ロヴィラとはシャルル・ド・ロヴィラ男爵の未亡人のことで、正式には、マリー・フランソワーズ・ガブリエル・シルヴィー・ブロンデル・ド・ロクヴェールと言った(図003)。彼女は一八五二年九月生まれなので、ヴァレリーより十九歳年上で、一男一女の母親であった。夫のド・ロヴィラ男爵は一八八七年四月に病死していた。つまり、モンペリエ大学の法学部の学生だったヴァレリーが彼女を一八八九年末にモンペリエ市内で初めて見かけて恋に落ちた時に、すでに彼女は未亡人であったことになる。夫人は敬虔なカトリック教徒として、貧しい教区に多額の寄付をしたり、慈善事業にも精力的に取り組んだりしていた。また、モンペリエ近郊のファブレーグに領地を所有し、その広大な葡萄畑の管理をおこなっていた。その一方、夫人はモンペリエの街中を日傘片手にきわめて優雅ないでたちで散歩し



図 0-3 唯一知られているロヴィラ夫人の肖像写真

たり、当時の地方在住の女性としては珍しく、カフェに出入りし、喫煙もし、アマゾネスよろしく馬も乗りこなしたりしていたと言われている。また当時、英仏海峡に近いディエップの海水浴場から一八二二年に始まったとされるフランスの海浜リゾートの波がようやく南フランスにもおよび、夫人もまた自宅近くの駅から汽車に乗って十一キロほど先のパラヴァス海岸に海水浴に出かけていた。ヴァレリーは濡れた髪から水滴をしたたらせた夫人が海から出てくる姿を目撃して描いたと思われるようなデッサンを残している。こ

の「現代のヴィーナス」⁵⁾こそ、一八九二年十月四日から五日にかけて、ヴァレリーが後に「ジェノヴァの夜」と呼ぶことになる一八九二年の知的かつ情動的クーデターの原因となった女性である。「Affaire」の表現は、まさにドレフュス事件 (Affaire Dreyfus) のような天下を二分する大事件を想起せずにはおかないので、大げさに思われるかもしれないが、「ロヴィラ事件」はまさにヴァレリーにとっての一大事であり、最初の恋愛事件 (love affair) であった。

ヴァレリーは彼女に宛てて数通の手紙を書いたが、一通も投函されていない。フランス国立図書館に保管されている「ロヴィラ文書」には、手紙の下書きもふくめて八十葉ほどの資料が残されているが、そこからは、ついに一度も直接に話しかけることになかった夫人から受けたヴァレリーの衝撃、混乱、そしてとめどのない妄想が増殖していくさまをうかがうことができる。「観念論者」⁶⁾ヴァレリーの頭が混乱の極みに達し、動きが取れない状態に陥ってしまったのである。他方で、ヴァレリーはロヴィラ夫人と会う前後から多数の詩を書き、その数篇

は雑誌に掲載され、詩人としての道を歩き始めていた。一八九〇年にパラヴァス海岸で出会い、意気投合したピエール・ルイスは自分の資金で雑誌『コンク』を創刊し、ヴァレリーにその詩の発表の場を提供した。さらにルイスを通じて知り合ったアンドレ・ジッドとは知的なことも性欲に関することも率直に語り合う仲となっていた。ルイスの導きでローマ街のマラルメ宅を訪れるようにもなっていた。

しかし、先人たち、とりわけランボーやマラルメなどの詩と比べようもないほど貧弱な詩しか書けない自分にヴァレリーは将来の不安を感じていたし、それ以上に文学という行為にはつねに曖昧さがつきまとい、十全な知性の行使からはほど遠いと考えるようになっていた。こうしたロヴィラ夫人をめぐる制御不可能な妄想^⑦に押しつぶされ、詩人として先の見えない自分に「否」を突きつけて、ヴァレリーは新しい人間に生まれ変わろうとする……。こうして起こったのが、一八九二年の十月四日から五日にかけての夜に起こった、後に「ジェノヴァの夜」と呼ばれることになる「ロヴィラ事件」である。

3 「K事件」

「ロヴィラ事件」の後、一八九二年十一月から一八九三年十月までパリに滞在したヴァレリーは、一八九四年三月、ついにパリでの定住を決意し、ゲ・リュサック通りの小さなアパートマンで一人暮らしを始める。その後、六月から七月にかけてヴァレリーはロンドンに滞在しているが、その間、彼は『カイエ』の前身とも言うべきノート（『ロンドン手帳』^⑧）をつけていた。そこにはまだロヴィラ夫人と思われる女性のデッサンが見られ、ヴァレリーが彼女への思いをまだ完全には断ち切れないでいるさまがうかがわれるが、同じノートには、ウロンスキーの『メシアニスム』に出てくる数式、さらには微積分や熱力学に関する数式が書かれている。ダ・ヴィンチやマラルメやワグナーなどへの言及も見られる。そして秋には、朝の日課として『カイエ』の執筆が開始される。そ

れは、決して得意ではないはずの物理学や化学や数学関連の読書を通して最新の科学的知見を吸収し、それをもとに自分の精神を新たな領域で開拓し展開していくための手段であった。そこでは、法則や数式で自らの精神や身体を律することにより、自らの激しい官能性をどう調整するか、端的に言えば、「ロヴィイラ事件」で起きたようなエロスの暴走をどう封じ込めるかが課題のひとつとなっていた。親しい友人たちとの対話以外、だれも導き手のない自己研鑽の試みの中で、まさに「毒をもつて毒を制する」方法を日々自らに課すことでヴァレリーは自らを作り変えようとする。ダ・ヴィンチの座右の銘と言われている「飽クナキ厳密」を我がものとするような「レオナルド・ダ・ヴィンチの方法序説」（一八九五年）も「愚かしさは私の得意とするところではない」で始まる『テスト氏との一夜』（一八九六年）もそうした禁欲的な精神活動の中で生み出された。その後ヴァレリーは、『カイエ』の執筆を続けつつも作品の公表を控え、一九〇〇年、マラルメやドガの薦めるジャンニー・ゴビヤール（一八七七—一九七〇）と結婚する。そして、それとほぼ同じ時期に一八九七年五月から勤務していた陸軍省を退職し、アヴァス通信社の取締役エドゥアール・ルベールの私設秘書として働き始める。その後、クロード、アガート、フランソワの三人の子どもにも恵まれ、彼は堅実な家庭生活を送っていた。一九一七年、第一次世界大戦のさなかに発表された長詩『若きパルク』が大成功をおさめたことでヴァレリーは一躍文壇の寵児になる。

そのヴァレリーの前に、一九二〇年六月十七日、彼と同じように当時の科学思想に強い関心を抱く、もう一人の独学者カトリーヌ・ポツジ（一八八二—一九三四）が現れる。彼女は結核の療養をしながら、一人息子クロードを育て、人気劇作家エドゥアール・ブルルデと離婚調停中の身だった。ヴァレリーとカトリーヌがたがいの精神の同質性を確認するには、熱力学の第二法則や相対性理論について二言三言、言葉を交わすだけで十分だった。たがいの言葉に磁気を帯びたように、二つの精神と肉体は引きよせられる。「K事件」の始まりである。自らをKain（カリン）と呼び、KあるいはC・K（カトリーヌ・カリン）と署名することの多かったカトリーヌとの出会いの衝撃について、ヴァレリーは一九二二年に次のように書くことになる。

歴史的に自分自身を眺めてみると、私の秘密の生活には二つの大変な事件が見出される。それは、一八九二年のクーデターと、一九二〇年の、何か、途方もなく際限のない、比較を絶したものだ。

私は九二年に、自分のありように雷撃を投げつけた。二十八年後、今度は雷が私の上に落ちてきた、——
お前の唇から。⁽¹⁰⁾

ヴァレリーがこの断章を書いたのは、カトリーヌとの関係が進行中の一時期である。「お前の唇から」の表現からも推測できるように、当時ヴァレリーの『カイエ』に興味を示し、これを編纂して本にまとめる作業を進めていたカトリーヌが『カイエ』をめくっている最中に、ふと目にすることを想定したうえで書かれた断章である。「九二年に、自分のありように雷撃を投げつけた」は、「ロヴィラ事件」において、あたかもヴァレリーが自らの意志でそれまでの自分を断ち切る決断をくだしたかのような書き方だが、はたして当時のヴァレリーにそれほど冷静さがあつたのかどうか、はなはだ疑問ではある。それはともかく、この断章を書いたヴァレリーの意図は、むしろ後半の、「二十八年後、今度は雷が私の上に落ちてきた、——お前の唇から」にあるのだろう。これはカトリーヌに向かって投げかけられた愛への誘いの言葉なのである。「一八九二年のクーデター」で決定された堅固な体制を揺るがす事態がカトリーヌの電気を帯びた唇から引き起こされたと告げることで、ヴァレリーは自分の身が再度危機的状況にさらされると認識していることを正直に彼女に告白しつつ、自分は危機回避のための行動をとらず、あなたのキスがその端緒となった二度目の「秘密の生活」を続けていく覚悟がある、と彼女に伝えているのである。